

独占の性格

——現代資本制経済の歴史的展望を求めて——

見野貞夫

はじめに

1 独占の組織

A 独占の面相と内基

イ 独占の兆候

ロ 独占の本因としての同類位階

i 資本の位階

ii 労働の位階

ハ 位階の再生産的帰結のとしての私物化

i 異種の癒着

ii もう一つの私物化——山分けの対物関係

B 独占関係とレーニンの見解

イ 位階について

ロ 位階の対物現象としての私物化について

C 独占による社会の風化（以上本号）

2 独占の社会内ポスト（歴史座標）——不発の共有

A 自由競争の異父兄弟としての共有と独占

イ 両者の重層構造——レーニンにしぼって

ロ 計画性と商品関係に関する三つの基本見解——ソビエト文献をめぐって

i 第1の見解——主としてプーギンの所説

- ii 第2の見解
 - a 共有と商品関係の接合——たとえばクロンロード
 - b 両者の折衷主義
 - c 「共有」に残存する商品関係——レプロフの考え方
 - d 粗雑な経験主義の批判
 - iii 第3の見解——主としてムサトフ及びポロポフスキーについて
- B 独占の再生産
- イ 独占に特有な種と類の逆転
 - ロ 単位の破産——敗戦国
 - ハ 同類位階の前提条件
 - i 解体をとげない破産単位の二形態
 - ii 下位（下請）単位の一類型としての東側
 - iii 位階の国際秩序——東西関係
- C 独占による蓄積構造の異変

はじめに

胎動と解体といった新旧二つの側面の独自の重なりにおいて共有する独占関係の社会経済的本性に関しては、われわれにとりこれを取りあげるのに、いまがはじめてだというわけではなく、以前にも多少は言及したことがある。本稿は、従前にもあった同一の問題意識の継承にすぎないが、同時にここに目あたらしい点があるとするれば、それは、独占を、現代史のうちにみて、地球を不幸にも二分する政治経済圏としての東西世界という現秩序に置いて、

1) 拙著、独占の若干問題（山口経済研究叢書第13集，1978年）

——，一国社会主義論——もう一つの独占構造（東亜経済研究叢書第4，5集，1975年）

——，資本制独占の基本問題——未完の共同所有，新東洋出版，1977年

——，現代社会主義経済論——労働私有制論序説，日経評社，1980年。

拡大して、全像的に把握する方向を表面に出し、東側とくに現代ロシアの定在も、独占に随伴した関連の社会事象だということにとどまらず、体質としても独占そのものだという意味において、独占の一現象に位置づけ、独占の構図の中にとりこもうとした点にあると思う。ひらたくいって、独占が通常はとらえられるところの、だがしかし、独占の一形態、帝国主義関係の一分域にすぎない西側形態を、論者は主として考えてきているが、これを補足して、われわれは、もう一つの東側形態も考えていこうとする。現代重商主義体制は二つあるというわけである。

本稿はこうした問題意識の整理を兼ねた一描写にすぎない。この整理は、東側とくにロシア革命を一国中心的に継承している現代ロシアについての研究、また半世紀あまりに^は生えてきた自国にとって生の認識票ともいえる「社会主義経済学」に関する批判と点検がすでに、私の手下に多少は蓄積されて用意のととのっていることに随伴した産物である。少なくとも、ソビエトの文献の点検と再考が、この本論の執筆動機、展開の支えとなっている。本稿につづいて、別に独立の著書の姿で、ソビエト経済論、または現代ロシア論並びに社会主義経済に関する学史などの、いずれかの部類にかかわる研究も、間もなく陽の目をみるだろう。

1 独占の組成

A 独占の面相と内基

イ 独占の兆候

生産関係が生産力として現象するように、生産関係内の事象として同類の在り方は異種の存立作法として発現する。同類の平等関係は異種の反目としてあらわれるが、反対に、同類の位階は異種の癒着としてあらわれる。このことは、程度と度合といった数量としても、まったくそのまま妥当する。異

種の反目と癒着といった対立的な二つの事情は自由競争と独占関係を特徴づける。

さらにほり下げて、労働同類に内在する平等関係と結合行為は、すでに資本によってかぶせられている支配と力能をはねのけて軽減するが、反対に、労働の位階秩序、上下分断は、支配を強制に、力能を強圧にこもごも、転化して、社会組成をいっそう耐え難く、重々しいものにする。二つの事情は同じく、自由競争と独占の内質である。

これを範疇でいえば、価値減少と節約剰余は物価の低落として現象するけれども、価値インフレートと独り儲け（^{モノポリプロフィット}独占利潤）は、価格の非低下、さらには価格の恒常的騰貴としてあらわれる。価格の傾向的な騰落といった、二つの相反する事情は、生産関係つまり資本制経済の良化と劣化、進歩と低迷を、そして歴史行為の相対的な進退などを集約する社会表皮の一般的な経済事件である。

政治において平等が民主主義として発現するように、経済では生産関係の良否が生産力の優劣としてあらわれ、この相似形的な内項として、価格の安価（廉価）は財の良質（有用度向上）としてあらわれる。

低価格、価格の低落が社会的進歩としてあらわれた私有行為が自由競争だったとすると、反対に、独占というのは、高物価、騰貴しつづける価格が社会風化を集約しこれと一対になって現象する独自の社会関係である。高価格、公害などの社会品質上の劣化は、独占の一般的に印象づけられた確実な日常的な事件である。

高価格と（→）公害は、価値インフレートと（→）騰貴する高価格に内基を有し、これに根づいているが、価値インフレートと（→）高騰する高物価は、資本同類の位階と（→）労資の異種癒着的な行為の集約であり、これによってうらうちされる。後者は、いまいちど、労働の上下分断と（→）資本の位階秩序によって、最終的にというか、内在的にというか、ともかく結局のところ、決定づけられるわけである。

したがって独占は、直裁にあって、同類の位階であるが、内質的には、労

働の位階（階級的連帯の破碎，上下分断，企業主義的分立）行為である。同行為の無批判な結晶としての思想，それは，端的にいて，カウツキー主義（ケインズ型の「西」の一国資本主義と「東」のスターリン型の「一国社会主義」）のことである。しかし，異種の癒着，まして対物的私物化は，独占の症状，兆候であっても，本質ではない。一部の論者が異常に力点をおく市場独占率は，独占の現象形態ではあっても，独占を日々培養し再生産する本因ではない。市場の占有度，社会を山分けし合う程度は，社会内の行為として，企業による企業の，資本による資本の，広く経済単位による経済単位の山分け，私物化，つまり位階秩序のことにあり，これによって定まる。独占は，他の経済現象とまったく同様に，対物関係ではなく，人びとを含めて社会内単位の相互行為（関係），つまり独自の形態の生産関係である。

価値とは，もともと，人びとの上にはずっしりと覆いかぶさってくるように設定づけられた支配力をば，かれらの相互結合，共同化の行為によって，いかほどはね返すかの社会的な抵抗，むつかしくいうと，物象力の切削度，あるいは支配を下剋上する度合とかみ合わせ，この両者の織りなす有機的合成の結果が示す収支によっても，なおものしかかってくる重錘ぶりを，近代市民社会の用語でもって表現してみせた状態であり，概念である。この反撃の行為，再支配の関係がほかでもなく，価値である。逆にいえば，市民社会の形態を一角として保持する価格といった包括的な一般用語は，広く人びとが服して，その前にひるみ，えてしてしばみがちな威圧の支配力である。

また，支配力を，あるいは強大たらしめ，あるいは軽微にとどめるのは，これをうけとめる諸単位が示してはね返すところの行為の大小，下剋上行動の強弱であり，これいかに依存する。価格が価値に依存するのであって，けっして逆ではない。価格は上がるのではなく，価値によって上げられるのである。支配力が強く，価格が高いのは，この下に服した諸単位なり民衆の下剋上行為が軽微にして，結合の度合が弱いからではあるが，価格，生産力，支配が強大にすぎるからではけっしてない。支配力なり価格は，それ自体，力もなければ，これを増減し軽重できる自主の運動源をば具有することもな

い。

がいしていえば、支配、価格が示す強弱、高低は、諸単位の結合と分裂にそれぞれ正比する。結合が周到で強大なとき、反撃行為も大きい。はね返す行為、関係の大小は支配力に反比する。この反撃ぶくみの行為、抑圧に服しつつもはね返す関係、この同じく市民社会名が価値であったからして、価値は、当然、価格としてあらわれるし、量的にも、自分に似せて正比し、これを決定づける。価値数値の増大は、諸単位のおちこむ分裂のふかまりを、したがって支配力の強圧と、価格の肥大を、意味する。反対に、諸単位の結合が十分に固く強靱なとき、価値は減少し、価格も低落する。価値減少は、支配と価格に服する諸単位が、分断内結合の強化をとげる現実的な運動のまたの名である。支配と物象力が、これに服する諸単位つまり民衆の織りなす結合と分裂の相互合成的な収支行為にひたすらねづくように、また人格（柄）が間柄（行為）の一角であるのと同様に、価格は、もっぱら価値の表現、価値の発現形態である。価値が小さいとき、価格は低い。そして価値の小さいのは、けだし結合行為が相対的に強力にして、反支配の反撃力が大きく、すぎましいからである。こうした価値減少は、反撃に出る諸単位間に、排他的性格だとはいえ、相互に平等な関係が介在するとき、あるいは排他的均一性が保障されているとき、最大値になり、もっとも激しくなる。同類単位の平等関係は、物象力の切削度を最大化し、それだから、また価値減少を、そして価格の低落をも、こもごも最大限にする。

ところが、同類の単位を位階に分配づけるとき、価値は減少せずむしろインフレートし、そのまま価格は、非低下となり、恒常的な騰貴という兆候において、自己を実証してみせる。

相互に平等な関係だといっても、私有関係は単位間の分断内平等、この拘束下に立つ排他上の均等であるから、それが吸いとった結合行為も、単位の価値を低める競争、支配力の自己磨損としてあらわれる。可能性として価値を減少させるはずの結合関係は、単位間の平等関係にそれがしごかれ濾過される場合、最大限になり、減少を中止しない価値は、最小限の数値を示し

て、人びとを、最多数、歴史的に解放づける。団結による支配は、さしづめ諸単位間の競争、価値減少、価格低下を通してあらわれる。分断と排他というかぎりでは、単位内または単位間の位階も、平等性も、いずれも支配力を生産する噴源であることでは変わりはない。しかし、それにしても平等性関係は、切削して弱くした支配力をもたらし、そしてこれを再生産する。価格の低下をもたらしながら、価格自体を生産する価値関係——これが自由競争を特徴づけた単位間の平等な相互行為であった。

ロ 独占の本因としての同類位階

ⅰ 資本の位階

同類単位が相互に平等ではなく、不平等である場合には、かれらの結合行為による物象にたいする下剋上の度合も、その分だけ強くはならず、したがって価値は減少せず、減少度も少なくなり、あるいはときには絶対的にも、インフレートさえして、価格は非低落で推移し、高水準の物価はいっそう高まり騰貴する。物価の不断な高騰は価値水準のインフレートであるが、それ以上の連動ぶりをもって、このインフレートは、直ちに位階のふかまりとか、社会の劣質化とかをも意味し、このバロメーターになる。人びともしくは諸単位の在り方はそのまま、対社会的な諸現象として、物価の在り方として露出する。

物価の低落に集約される社会の進歩は、同類の単位が位階に配置される場合、そして、それがふかいとき、否、ふかまるときには、最大限に、妨害を受け、阻止をこうむり、低迷に反転する。それだけに、既成支配の持続する期間は長くはなる。独占とは、同類の位階を内基として、社会的進歩を体現するはずの歴史前進の距離は稼がずに、社会の迂回を集約した歴史の延命時間だけを、もっぱら徒労にも、稼ぎだすにすぎず、それゆえに、この随伴現象として、公害を含めて、汚染と汚損による品質の劣化をかぶった社会風化を一貫して拡散しがちな歴史の道草、暫時のあだ花体制である。

独占は私有であり、私有は排他であり、排他は分断であり、分断は自然発

生である。

単位の自然発生は分断の源流である。多少とも歴史前進に結びついているかぎりにおいて、分断はともかく、一定の存在理由を有する。その前進にしても、これは、同類単位が平等な度合に、さらには行為の結合、行動の共同化に正比して、この完全度に対応する。だが、反対に、最大限に非前進の排他とは、当然ながら、同類間の平等関係を欠いて、資本が資本の上に座わり、労働が労働を使役する同類位階の秩序である。逆にいえば、同類の平等関係こそが、その相互間の連帯強化ともども、異種の反目としての階級対決を、最大限に、するどくも、激しくもするのである。同類の平等が正常な階級の在り方を保障づける。このことは、けだし、平等関係に濾過された排他が競争になって発現し、支配を自己磨滅に追いこむからである。そして、集中によって単位がふくらみ少数の巨塊になったときには、^{ひべい}疲弊もそれだけずっと大きいわけである。いかほど集中をとげても、競争が依然として、終始、不変だという場合、資本なり価格は、最大限に損なわれたり、最低に下落する。これに反して、位階に支えられて排他のもっとも非前進の形態にして人びとのこうむる支配力をもっとも重くしつつ、風化を再生産するのがほかでもなく、この独占関係である。前進度がもっとも鈍く低迷する体制として、歴史の末期にはいっても登場してきた独占は、^{たそがれ}黄昏を待って飛びたつミネルヴァ梟であり、私有の末期症状として露出する悪性腫瘍である。しかし、今日の独占は、私有内のあれこれの独占ならず、市民社会の独占にして、しかも市民社会が私有の成熟し切った体制であるところからして、歴史が長らくそこでうごめいてきた私有と実際に訣別を告げて脱出する出口に位置する独占、共有のもう一つの迂回形態、択一の不発形態としての独占である。同類単位間の平等な排他関係は、支配力を最大限に弱めるとはいえ、これを再生産し培養するのであるけれども、単位間に位階が介在する場合には、位階は、このふかまりをも含めて、いっそう重くなることもあるところの強大な支配力を産みだして、再生産する。支配力を重くしながら、それを培養し再生産するのが独占に特有な一般現象である。前述したように、支配力を軽くしつつ、

これを産みだし再生産する自由競争と、これはまるで対照的である。

ii 労働の位階

独占とは、前述のように、同類階級内に再生をとげた上下秩序、支配と強制の経済関係のことである。こうした経済関係が、同類位階、同業者の主従秩序である。ここで同類なり同業者は、階級人格としては、あるいは資本であつたり、あるいは労働であつたりするけれども、なおいずれにも無関心に、ひとしくそのようなものとして妥当する。だが、労働が資本を培養し再生産するかぎりにおいて、労働の上下分断、労働者の企業主義的分業による組織づけ、労働階級内位階のカウツキー主義などをすべて包みこむ、一口にいて、労働内の同類位階制こそは、独占の本質、内基中の内基であろう。

資本の同類位階に制約づけられて、これに似せて作り上げられた労働の位階も、自然発生的には、流れに流されてときとして作動し易い。資本が労働に強圧を加えて、なお強力な場合、これに屈して労働のほうに位階は成立しがちであるが、この位階の形成によって、労働者は、これまでは多少とも虚勢（「張り虎」）を免れなかった資本の有力ぶりをはじめてうらうちし、みずからに加わる強圧をも再生産して、現実には資本の位階をも強め固める。独占の成立には、資本の位階に、これをかぶせられた労働の組織がいかに反応し合うかの相互の敵対関係の在り方が決定的にものを云う。私有と排他の組織者として、資本が、労働を使用するだけではなく、同類の上にも座わろうとするのはさしとめようもなく不可避であり、排他らしい日常の些末事であるが、この個別的独占行為を体制として露出せしめて独占に結晶させるか否かは、位階かぶせの資本による挑発に労働者がそもそもどう対応するかに、つまり、おしつけられ位階づけに屈して自分のほうでも、同じく上下分断を作るのか、それとも無条件にこれをはねどけて拒絶するのか、こうした択一の行為にもっぱら依存する。この点において独占は、すぐれて労働者階級の主体的問題である。さしづめ、資本の位階にかかわって、われわれはこれを本因と名付けたけれども、さらにふかめて真因は、結局、労働の位階にあることを、自戒をこめて、われわれはここに確認しておかねばならない。この位

階によってはじめて、これを達するための方策、手段をば、これがどのような仕方で拵えられるにせよ、いかなる手段と源泉から調達されようとも、回収し補填して、資本の位階をうらづけつつ、真実に自立した関係が成立するわけである。労働者は、人間定在の主体的選択として、えてして流れに流され易いのも、以上の文脈^{コンテキスト}からして、独占の成立と作動にたいするかれらの責任はけっして軽くはないだろう。流れに流されず、これに抗して位階つぶしの歴史行為もまた、かれらには十分に可能である。これは、階級的組織であるが、この前にまずもって、連合と結束を通して自然発生の情性をさかなぜして遮断できる人間定在の証明舞台にもなりうるのである。階級組織の問題点として、独占は、階級組織のもう一つの側面、階級反目のうら側を形づくるといっても差支えないだろう。労働者諸個人とともに、これを組織する職業的前衛機関（革命政党）の素質と行動は、独占にとっては、決定的に肝要な戦略的位置を占める。

私有によって踏まれても蹴られても、人間とともに本来的在るし人間定在のアリバイとして役立ちさえするところの行動の結合なり共同化は、まずもって、労働の、そして資本のそれぞれの同類的平等関係が吸収し濾過することになる条件下においては、もっともはりつめ緊迫した異種の反目がみられるが、これが最大限に激しくなければ激しくなるほど、これに応じて、物象にたいする下剋上という社会的支配（革命）も最大限極値にたっして、歴史前進も可能なかぎり大幅に前方に転ぶし、社会を含んで歴史は最大限にスピーディに走行を速め直進する。こうした事情を集約する市民生活的現象としての物価下落は、ここではもっともドラステックにして、かつねぶかくあらわれる。

だがしかし、反対に、同類間の不平等が恒常的に介在する場合、社会と歴史は、たとい後退とか、絶対的低迷はないにせよ、平等ならばちとれた状態よりもはるかに遅れをとり、相対的にずっと後退して退歩を強いられること必至である。こうした相対的退歩の歴史体制こそ、資本制独占もしくは共有に共軛部分として、内在的に結ばれるところの、私有内ぎりぎり最後の資

本関係である。

ハ 位階の再生産的帰結としての私物化

同類の位階は、独占の本質的な側面として、人びととか個別単位とか、これら相互間の在り方をば意味するが、位階を内基とするかかわり方において、独占は人びとなり個別単位の社会、国家、市場、制度、物件、者を含む財貨²⁾などの分域にたいする対物関係として、おのずとあらわれる。

ところで、独占 (monopoly) が直接に表示する用語上の規定、すなわち独り占め、単独支配、単独政権、これらは、私物化、癒着といってもよく、たしかに独占の兆候ではあるが、独占を真に独占たらしめる内基ではない。こうした兆候を再生産するのは位階なのだから、位階は、それ自体、自立の行為である。だが、私物化は、行為は行為でも、派生の行為であるために、それだけに限定して孤立してとらえてしまうと、十分に理解できなくなるし、ひいては独占の本性も、まして再生産の真実な構図も、ときとしてみのがしかねない結果になる。

ものと単位 (人びと、組織) との間に結ばれる対物関係は、もっぱら単位の相互間関係の関数であり、これによってひたすら決定づけられる。対物関係が一体何であるか、いかにあらわれるかは、物と区別されたもう一つのものとしてともいうべき者の相互に織りなし合う関係がそもそもどんな組織に

2) 者の私物化については、学者、技師、研究員、管理スタッフなど高級熟練労働者を、独占体は山分けして確保し、搾取と利潤の源泉を手に入れる。ポサテンコに従って、不生産人員の増加指標でもって、これを示すと、少しデータは古いが、1979年、アメリカの巨大法人におけるこうした部類の登録要員は次の通りである。GM 2254人、フォード・モータ1484人、ゼネラル・エレクトリック1214人にして、全国の同従業員1/3を占める。これらの会社だけで博士級の学者・技術者は、これら法人の研究員中40%を集めており、とくにウェイトの高いのは物理学者であって、1980年、アメリカでは224人のうち、博士級研究員11.84人は物理学者、84人は技師、1.684人は社会学者、0.524人は数学者であった。

(Н. Я. Посатенко: Монополизация квалифицированной рабочей силы США в условиях научно-технической революции, *Вестник Московского Университета*, No. 5, 1982)。

在るのかにしたがって、ありのまま一義的に、定ってくる。独占に特有の同業同類の位階という内基、者内相互の上下秩序、これは、位階主を代表人格とした独占組織による社会の私物化として露出し、歴史の山分け（寡占現象）として率直にあらわれる。私物化なり山分けの集約的な市民生活内の一現象がほかならず、高物価の騰貴であった。高水準の物価の恒常的騰貴は、独占の兆候として、私物化といった一つの派生的な側面、対物関係を表示するだけである。分断—物象化は特殊的に位階—私物化の独占形態になる。

たとえば、国家公人を私物化するにしても、それ自体を直接目ざしてじかに試みたところで、それは、所詮、徒勞に終わること必定である。どんな資本主、いかなる支配主にしても、主観の企図、個別の行動においては、ことごとく自己による対象の独り占め、私物化は、文句なくたちどころに図ってこれを入手したいところであるけれども、そうだからといって、これが思い通りにそのまま実現し、客観的現象に化して、そう成立するかとなると、これはおのずと別なもう一つの問題である。個別単位の直接的行動が、企図ともども、もとより私物化の事業に在るものの、この主観的努力の社会における客体化は、私物化の行動的担い手であるはずの単位相互の在り方によってひとえに定まる。すなわち、単位間の同類位階の組成が制圧するのか、相対的平等性が支配するのか、このいずれかにしたがって、社会現象としての私物化の成否も、必然的におのずと定まる。私物化は、独占にとって一般条件であるが、けっして決定的原因ではないし、派生の条件であるが、本質の噴源ではない。

私物化という個別単位による主体的独占行為が、単位相互間の平等関係にしごかれ吸いとられて、相互にうち消し合い、結局、社会的には品質良化に解消するように、一時の高物価は、競争を通して、所詮、物価の下落に落ち着く。これは、自由競争の事情なのであるが、位階の否在・欠落がこの事情の根因である。

独占の生成はまた位階の問題に帰一する。ここに独占は、位階そのものであるとともに、兆候としての独占ならばいかなる私有下でも在るから、はじ

めに独占ありきという考え方のほうが正しいし、独占を自由競争の母胎だと考えたほうが適切であるだろう。われわれは、これを学びとる必要がある。そうだとすると、自由競争の否定が独占ではなく、かえって反対に、独占の否定が自由競争である。こういうふうに把えるほうが科学として正しい。正常細胞の否定が癌ではなく癌細胞の否定が健全な細胞であるとみるほうが医学上はいつそう正確なものと、これはちょうど同じことであろう。単位の直接に個別の行動が独占なのだだとすると、このポステリオーリーな集約現象がほかでもなく自由競争である。いまいちどはじめに独占ありき！

同類の位階を組織し、同類を下敷きに配して、ライバリティを消し私物化をよしんば実現できたとしても、このことは、カウツキーの「超独占」（「超帝国主義」）または世界平和の議論とは反対に、私物化が私有・排他の現象である以上は、どこまで闘っても主従の定まらないで引分けに終わる同等な支配力を保持した単位が複数にかぞえて残らざるをえないこと、これを意味する。ひらたくいって、独占は、現実には、複数の独占体間に介在する競争として、独占的行為として、明らかに、寡占である。こうした独占組織が依然として、かつての自由競争以上に、力強く生死を堵して熾烈に格闘する事例も皆無ではなかったし、今後も、私有がつづく以上、残念ながら、ありえないという保障は何一つない。

i 異種の癒着

ところで、独占の内基は同類の位階であって、これが対物関係として私物化を可能にするのだが、これを者内相互行為に限定してみると、者内上下秩序としての同類位階と、これに決定づけられた異種の反目がそこにみつけだせる。この場合、同類位階は異種の癒着として現象する。位階は、異種にたいする下剋上の行為（反撃行為）を鈍らせ、緩やかに化して、このために支配（迎撃力）を強めて被圧（主従）の構造を丈夫にし、全体として彼我の溝をふかめる。被圧の構造、彼我の溝こそ異種の反目攻防の舞台だから、位階は、下剋上の度合が衰減せしめるために、社会風化の方向に、異種単位の反目を追いこみ、鈍らせてしまうのである。同類の位階は、異種の一般的な在

り方を、個別単位ごとに分断したり、もしくは社会的分業を企業内分業で切断しおきかえる——たとえば、事業所、企業、資本、国などの個別単位をこえて、階級と階級の無差別な反目という正常な仕組を、こうした単位の自己完結的な組織でもって囲いこみ社会連鎖を分断する——たりすることだから、異種の反目以上に単位間の反目を優越的たらしめた異常な事象をもたらすし、これを必然化する。この構図においては、個別単位内の異種は、相対的に馴れ合って、正常に健全な対立の反目機能を放棄する。異種の癒着である。それゆえに、同類の位階は、異種の癒着にも、当然ながら、再現して、これを随伴する。位階のあるところ、この組織の腰には、つねに異種の癒着がぶら下っているのである。

もういちどいおう。同類の位階は異種の癒着として現象する。この癒着こそが前述した異種反目の鈍化に関する社会的内容にほかならない。位階を軸心とした異種癒着の階級内関係は、あらためて私物化の対物関係としてあらわれたどりつく。同類位階は、異種の癒着、さらに私物化へと、ここまでよじのぼっていく。位階と癒着は、者内相互の関係に収まり、お互いに裏表^{うらおもて}、もしくは本質と派生の関連において、相互に依存し合っているものの、両者が全体となって、もういちど対物関係、私物化としてあらわれる。

ii もう一つの私物化—山分けの対物関係

独占は、まさしく独り占めであり、単独支配、単独政権のことである。しかし、単独とは、文字通り、単一のことではなく、少数者の独占という意である。これはいうまでもない。けだし、私有は、性質上、排他であり、これと不可分である以上は、こうした文言通りにそのままの独占はおよそありえず、いかほど集中を高めて、単位を少なくし、巨塊化しようとも、なおもって勝負のつかない同等力の競合^{ライバルティ}＝格闘の関係は、消しようにも消せず、介在して、これが必ず残すのだが、これこそ現実の独占関係だからである。独占体（者）間の熾烈な競争を消しえないこうした排他の条件に拘束された独占関係を、人びとはあらためて、寡占 Oligopoly と呼ぶ。だから、独占の現実相を問題にするかぎり、それを独占的關係と表現しておいたのである。独

占が前述のように、資本の、私有の、排他の一現象である以上、どこまでいっても彼我間にまつわる同等な力関係があるために、勝負がつかず、引合の結果をもって終了するところの、独占組織間の激しい執拗な反目行為は、とうてい避けがたく、私有の習性だけに、これを払拭するのは、およそ不可能であろう。これはすでに言及した。

ところで、破産なり倒壊という犠牲の単位をつねに輩出して止まない独占組織間の執拗な競争は、一面では、他の、社会の、それゆえに全私有機構の消費、磨滅であるが、他面、多少とも独占が存在理由を失わないかぎりにおいてそれ自体の維持行為、再生産の礎石である。なぜそうなのだろうか？

理由はといえば、それはこうである。すなわち、独占が同類内の位階である以上は、位階を形成する単位、とくに下部単位の不断な輩出と再生産は、単位の素質が向上しようが、劣悪化しようが、これにさしあたりおかまいなく、独占を扶養するために、不可欠な前提条件にして、必ず要求されるからであり、そして下位単位（下請）こそはまさに破産の単位にほかならないからである。位階を本領とする独占を縁の下で培い養うのはたしかに下請であるけれども、その下請がとめどもなく噴出してくる出生地は、破産単位においてはほかには、およそありえない。破産単位が社会的進歩の無慈悲なローラーにかけられて社会の屑として空中に分解し離散してしまい、歴史前進にはつきものの必要悪的な摩擦熱として消え果てる——こういうのがまさしくかつての自由競争に多少とも特有な現象であった。ひるがえって、反面、破産単位が下請に化して、ともかく再び資本の一成員として再生をとげ、資本組織の欠けがえのない一環を担いながら、けっして消え失せてしまうことのないところ、破産単位の不解体という事象に、独占を独占として成立せしめる面目、独占再生産の内基なりスプリングポイント枢要点が介在するのだといってよいであろう。

破産単位は弱体であり、劣質である。劣質であり不効率であっても、資本として何とか救済され更生の図かられる経済関係は、所詮、風化の社会であって、必ず品質劣化の諸行為である。破産を更生させる独占、この更生事

業に破産の救済よりも、むしろ自己を利して強大化する根因をみつけだす独占、この独占は、当然のことながら、一面、劣質を淘汰する進化のメカニズムと、他面、同時に、淘汰が排出した犠牲を拾う風化のメカニズム、この二つを使い分けながら、同時に、それを機能として合わせもたねばならない。殺しては活かし、活かしては殺す、あるいはひねってはなぜ、なぜではひねる——まさに渡世人ふうな複雑で矛盾した二面ぶりだが、これを、独占は、両手使いとして、体質的に具備するのである。

社会の風化と進歩、この二つは、もっとも濃縮された経済事象、市民的事件としては、価値インフレートと価値減少、価格の恒常的騰貴と物価の傾向的下落としてあらわれ、独占行為と自己競争を招きよせて、みずからの恰好な史実として、二つをわりふってみせる。しかし、既述のように、この現象は、独占の兆候、発現の形態ではあっても、真髓、本質ではない。物価の動向いかんは、それが付着する物財の存り方に起因するのではけっしてなく、こうした兆候なり現象が内部的に抱える人びと、または経済単位が所在する相互関係に、かれらの在り方にねづき、これによってのみ、ひとえに決定づけられるわけである。

B 独占関係とレーニンの見解

イ 位階について

同類の位階を独占の内質と把え、この点をレーニンがいかに重視しているかの論述を、位階の派生事象としての私物化に関するかれの見解とも結び合わせて、『帝国主義論』の中だけから引証して、以下、少しばかり考察してみたい。

独占は、単位を企業として考えても、国家とか同盟国グループとして、理解しても、相似形の三角形における大小二つがそうであるように、本質上、何の変化もなく、同一の特性が抽出できるのであるが、小さい単位、たとえば企業とか資本とかに濃縮してほり下げ一般化して考えるほうが、どちらか

たとえば、本質がずっとよくあらわれるし、それをいっそう明確につかめるのである。

ところで、レーニンによると、「最近資本主義の根本的特徴は、最大の企業家の独占的諸団体の支配ということである」(〔邦訳〕国民文庫版118頁)。

「帝国主義は金融資本と独占の時代である。……この金融資本と独占は、自由への熱望ではなく、いたるところに支配への熱望をもちこんでいる」(前掲書, 174頁)。

位階を重視する同じような考え方は、次の文節に、この一角を与えている—すなわち、当時のドイツ人学者ケストナーをして自説を代弁させ、「原料(半製品ではなく)を生産する工業は、カルテルの形成により、半製品をそれ以上に加工する工業を犠牲にして、たんに高利潤という形で利益をえるばかりではなく、この加工産業にたいして、自由競争のもとではなかったような一定の**支配関係**に立つにいたった」といわせて、以下のように、なおかれはつづける。

「支配とこれに関連する強制の関係——これこそ『資本主義発展の最近局面、にとって典型的なものであり、そしてこれこそ、全能の経済的独占の形成から不可避免的に発生せざるをえなかったものであり、また、事実、発生したものである」(前掲書, 37頁)。

まず、企業レベルの位階については、レーニンは次のように述べた。

「……以前には比較的『独立的、であった経済単位、あるいはもっと正確に言えば、地方的に孤立していた経済単位のますます無数のものが、単一の中心に従属化する……」。

「大企業、とくに銀行は、ただ直接に小企業を併呑するだけではなく、さらにまた、小企業の資本への『参与』により、自己に『併合し』、それらに従属させ、それを『自己の、集団のうちに、…自己の『コンツェルン』のうちに包含する」(前掲書, 43頁)。

「こうして、われわれは、全国をおおい、いっさいの資本と貨幣収入とを

集中し分散する数千数万の経営に、単一の全国民的な資本主義経済に、そしてさらには全世界的な資本主義経済に、転化しつつある運河の濃縮な網の目がいかに急速に発達しつつあるかを見る」(前掲書、46頁)。

次に、国家レベルの位階では、宗主国と植民地、先進国と後進国、債権国と債務国などの関係が考えられる。これについては、次の文節がレーニンからよみとれる。

「この時代にとって典型的なものは、植民地を領有する国と植民地との、二つの基本的なグループが存在するというだけでなく、政治的には形式上独立国でありながら、実際には、金融上および外交上の従属性の網をもっておおわれている従属国の種々の形態が存在するということである」(前掲書、122頁)

「個々の大国と小国とのあいだのこの種の関係はいままでつねに存在していたが、資本主義的帝国主義の時代には、それは一つの体系となり、世界分割、の諸関係の総体中の一部となり、全世界的金融資本の活動の連鎖の一環に転化している」(前掲書、123頁)。

「われわれの目のまえにおこなわれているのは、もはや小企業と大企業との技術的におくれた企業と技術的にすすんだ企業との競争戦ではない。われわれの目の前にあるのは、独占とその抑圧とその専横に服さないものが、独占者によってしめころウドウシエーニエされるという事実である」(前掲書、35頁)。

国家と企業間の、公人と私人の間の必然不可避の私有内貫串に関しても、さすがレーニンは、的確にも、次のように述べて、看過することはなかった。すなわち——「金融資本の時代には、私的独占と国家的独占(資本)とがたがいになんかからみあっているか、またいかに、前者も後者ととも、実際には最大の独占者たちのあいだの世界分割のための帝国主義的闘争の個々

の環にすぎないか、ということは」明白である（前掲書、104頁）。

支配と強制を欲する位階はまさに独占の本質である。「独占と、独占とならんで存在している自由競争とのあいだの矛盾、金融資本の巨大な取引（および巨大な利潤）と、自由市場における『正直な』商売とのあいだの矛盾、また一方ではカルテルおよびトラストと、他方ではカルテル化しない産業とのあいだの矛盾」といった同類の上下秩序間の矛盾は「帝国主義のもっとも深刻な、もっとも根本的な諸矛盾」である（前掲書、168頁）。こうした同類位階を強めるのに役立つのが、レーニンによると、当時の「参与制度、であって、それは、この事業に貢献するのならば、およそいかなる「醜悪な行為」でも、なりふりかまわずあえて果たしてみせる位階用の制度である。ただし、レーニンによると、「親会社、の指導者たちは、形式上は、つまり法律上では「子会社、にたいして責任をおわず、子会社は「独立なもの、とみなされており、子会社を經由してどんなことでも遂行できるからである」（前掲書、68頁）。

位階の頂点に立つ「親会社」、独占主、元請機関の社会的に集約された少数支配、社会的な寡占関係を、レーニンは「金融寡頭制」と命名した。金融資本は、産業資本内独占による銀行の私物化、両者の一体化として、元請資本の総称だとみなしてもよいだろう。「参与制度」と相並び株式資本の「民主化」も、位階を固める挺子だとレーニンはとらえている（前掲書、67頁）。ハンス・キデオン・ハイマンの作品から引用した文節でもって、レーニンはこれに次のように語らせる。

「指導者は第1会社（文字どおりには『母親会社』）を統制し、親会社は、さらに、それに依存している諸会社（子会社）を支配し、その子会社はさらに『孫会社』を支配する、等々。だから、それほど大きくない資本をもつて、生産の巨大な領域を支配することができる。実際、資本の50%を所有していなくとも（「いなければ」が訳文）株式会社を統制するのにつねに十分であるとすれば、『孫会社』で8百万マルクの資本を統制する可能性をもつためには、指導者はただ百万マルクを所有していればよい」（前掲書、66-7頁）。

同類の位階には、資本の位階のみならず、もう一つには、労働の位階がある。労働の位階は、資本の位階に制約され、自然発生的には、これにひきづられて付随はするが、なおこれに作動のフィード・バックをも加えて、これを再生産し、ひいては独占組織全体を扶養する。二つの位階は、相互に連動して、制約づけられた決定の行為と、決定づけられた制約力能との間に介在する例のごとき二者闘争性格でもって緊密に結ばれている。労使の内在的本性からして、たしかに労働の位階は資本の位階を保障し、黒まくの別な表現にもなるが、けっして逆は成立しない。たとい、資本がいかに挑発し、自己に似せて位階を方向づけようとも、労働が毅然として、これにのらず、頑強に平等関係の保持を、仮りにも、貫徹し、一糸乱れなかったのだとすれば、資本の位階も一人相撲に化して、およそ独占は成立するはずもなかったであろう。独占の本質は、位階、とりわけ労働内位階である。独占関係の国際的に具象的な事件としての帝国主義行為の分析に、レーニンが、労働の位階を合理化し弁明するカウツキー主義（日和見主義、超帝国主義、労働貴族制、社会排外主義……）に「特別の注意」を加えて叙述した旨を、『帝国主義論』の序文において明確に述べているのも、この位階が独占の本質である点からして、けだし偶然ではなく、至当なことである。しかし、ともに位階に染めぬかれた労資は、階級的に正常な反目を鈍化させることで、相互に馴れ合って内部的に結びつき、一資本として格闘の単位組織を形成する。

高物価による独占利潤は、位階に、とくに位階一般、ひいては独占全体の真因たる労働の位階にも定着して、これをもとらえるのだが、これをばねに、実質的に、価値インフレート、そして高価値を形成することによって、位階は私物化を補填するし、独占は、独占利潤をも回収し、高価格を保障づけて固める。労働の位階は、位階一般の真因であるがために、私物化の本質中の本質である。「帝国主義諸国のプロレタリアートの特権的な層は、ある程度、幾億の非文明諸民族の費用で生活している」（前掲書、187頁）。こうした労働の上下分断こそ、レーニンにとって、独占の真因である。したがって、これを逆に読みこめば、反独占の組織は、労働内の位階の清算行動であり、か

これらの連合破碎の修復と再連合のことである。

いま、独占のかわりに、帝国主義を、労働内位階のかわりに、日和見主義をおきかえるならば、レーニンの見解は、まったくわれわれの主張する見解を表現し確証している。日く——

「……資本家によって、独占的高利潤が獲得されることは、労働者の個々の層を買収し……それらの労働者をその他すべての労働者と対立させて、当該部門あるいは当該諸国のブルジョアジーのがわにひきつけさせる経済的可能性を、彼ら資本家にあたえる。そして、世界分割をめぐる帝国主義諸国の敵対関係の激化は、この傾向をつよめる。こうして、帝国主義と日和見主義との結びつきがつくりだされる。この結びつきは、イギリスでは他のどこよりもはやく、明瞭にあらわれたが、それはイギリスでは、発展の若干の帝国主義的特徴が他国よりもはるかにはやくあらわれたからである。……帝国主義との闘争は、それが日和見主義に反対する闘争と不可分に結ばれないならば、一つの空虚な虚偽のから文句にすぎないことを理解しようと欲しない人々ほど、危険なものはない」(前掲書、180—81頁)。

まさに、その通りである。独占は労働者による主体的定在の作法から由来するから、これを葬り消す作業も、また労働者の歴史行為の問題、かれらの歴史任務の課題である。独占は労働者と対立した資本だけの専有物件、労働者に被害が一方的におしつけられる見本だけの排他行為ではない。むしろ、独占によって被害をこうむる労働者の在り方こそは、資本が労働によって養われている以上、独占の定在を根本的に決定づけるのである。独占の成立に第1の責任をもつのは、それだから労働者だというわけである。だから、ひるがえって、反対に、独占を消去し、歴史を低迷から、社会を風化から解放する、歴史の前進に悖らないこうした事業の成否は、何よりもまず、労働者位階の清算、連合破碎の修復と再連合、そのために没私性の共有主義など、かれらの主体的な行為の在り方に、もっぱら依存する。独占は、成立も、消

去も、ともに真実には、労働者階級の主体的な在り方にのみかかわっている。われわれのいう労働位階に相当するレーニンの名づけた日和見主義にたいする批判をかれがいかに関心し、このためにどれほどに激しい破碎の作法をもって弾劾しているかの理由づけの一つも、まさにここにある。労働の位階が資本の位階を、それゆえに独占全体を決定づけて掌握している、こうした客観的組成からして、この批判はけだし当然のことであろう。独占の成否、興亡の決定因は労働階級の主体的態度に在る。だから、この位階を弁護した理論としてカウツキー主義の批判に、レーニンが最大のウェイトをかけたわけである。

□ 位階の対物現象としての私物化について

もともと、労使の階級関係は、同類に位階があろうがなかろうが、またそれが平等関係にあるか否かを問わず、それにはまったく無頓着に、私有には基本的に不可欠な単位間反目である。内部に位階を抱えているからといって、労資は、資本関係でなくなったり、私有単位であることを辞めたりするわけではけっしてない。ただ、位階の存否によって、社会と歴史にたいして、資本制経済が占める位置、並びに果たすべき機能は大きく修正をうける。これはたしかである。

位階—癒着から労資が多少とも一体になって馴れ合った一つの資本単位は、同じようなもう一つの、または他の単位に体当たりして、同類単位間の排撃と反目を第一義的に高めて、異種の対立に優先させる——このことは独占には普通になる。秩序が逆転し無節制な異種と同類のこうした倒錯の組織は、ほかでもなく異種の反目が同類の位階によって合体され、いってみれば私物化されていることの鮮明な表現である。単位の内部に介在した異種—同類の内在的な転倒は、競争という対単位現象の形態においても、外部的にそのまま露出する。

私物化は、前述のように、本来、位階に培養されて発現する派生的事件だが、対物関係ならず、あるいはそこまで行かせないで、者内行為としての階

級関係，または生産関係にとどめてとらえてみると，類による種の関係内私物化として，おしもおされぬ癒着が人びとの目にはいつてくる。だから，異種の癒着とは，対物関係にたどりつかずに，なお一步手前の生産関係内にとどまった私物化の現象であるといつて大過はないだろう。癒着も私物化の一変形である。私物化と癒着は，生産関係の外と内，対物関係の表と裏，こういった活動舞台こそ相異なるけれども，ともに位階を分有して，これに由来するところの二つの私物化類型であることも判明する。関係が力を，者内行為が対物関係を，一方的につき上げる運動が，自立の運動作用として，唯一の真実な運動であるから，この客観的な内在運動に連動した上向の道程にそつて，異種の癒着を，同類の位階に媒介された派生ともいふべき異種の者内接合として，同類の位階と私物化との中間項だと，われわれは位置づけてきたのである。たしかに，発現（下向）としてみると，癒着はもう一つの私物化だが，他面，逆に，発展（上向）においてとらえると，私物化は，同時に，癒着の，ひいては位階の現象形態だということも，分明になるだろう。

相互に別称になり合つて往復する内的関連を位階と癒着がもっているのだとわれわれはいわない。両者が相互に密接に結ばれているとわれわれはいうのである。資本の位階を前提にして，資本による労働のとりこみ，私物化は，労働の分断であり，労働内に，上下秩序つまり位階をもちこむことである。制約の方向と名づけてもよいこの道筋を，レーニンは，「労働者のあいだでも，特権をもつ部類を遊離させ，これを，プロレタリアートの広汎な大衆からひきはなす」（前掲書，152頁）という帝国主義の傾向と呼び，エンゲルスも，すでにマルクス在世中に，書簡中で私物化について指摘し述べているのだという。また，別に，エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』（第2版，1892年）に主張されている点だが，これをまとめたレーニンは，1）この国による全世界の搾取，2）世界市場におけるその独占的地位，3）その植民地独占，これが原因であるが，これがもたらす結果はといへば，1）イギリスプロレタリアートの部分がブルジョア化するし，2）プロレタリアートの一部分がブルジョアによって買収されてしまうこと，これである。

私物化→位階といった制約の方向でレーニンは原因—結果を位置づけて考えている。

労働内位階の形成に成功した有力資本主は、独占主に昇格するとともに、位階形成の前提的挺子として役だった、恫喝、虚勢、見栄などのために無理にも投じた支出、また張子の虎、強大の外観を維持するために強いられた身分不相応な収支赤字を、拵えられた労働内位階をもって補填し、独占組織という風化を集約する価値インフレーションを通してかろうじて回収するわけである。この道筋は、さきの制約の方向を補足したもう一つの、いってみれば決定づけの方向であろうか。

資本による資本のとりこみともども、これを威圧と恫喝の手段として拵えたはずの労働内位階も、資本による労働のとりこみの形態として、まさにことごとく私物化である。私物化が同類位階の外皮となって定在する組成に照して、位階はなるほど広く私物化であるが、だからといって、逆に、私物化がことごとく位階だというわけではない。ともかく、私物化は、独占の面相だけに、癒着を、そして位階を包括的に表現するのに足るまたの名である。しかし、名称の一般性は、がいして、これを培養する内実、決定性とはかえって逆な順序に立つ。私物化は癒着によって、癒着は、位階によってはじめて、それぞれに成立するのである。

私物化と同類位階は、相互に補足し合う二つの道筋によって結ばれる。癒着は、二者の往来を媒介するから、往来する二つの道筋の刻印を含む。この刻印に応じて、癒着もまた、二面的に考察して差支えないと思われる。この論点はいま指摘するのにとどめておいて、本稿では、さしあたりこれにかかわらずに、次に進もう。

それでは、同類位階の発現ともいえる私物化、資本の集中による対他単位の支配から由来した社会の山分けふうな集積、ともかくこうした独占の対物関係を、レーニンが一体どうみているかを、同じく『帝国主義論』だけを参照した狭い範囲ではあるけれども、少しばかり点検し調べてみようと思う。かれは、明らかに集中ではあるはずの事象を集積と名づけてとらえる。独占

は、たしかに蓄積内の二側面の一つ、集中がもう一つの側面としての集積を壟断して私物化し、一体化して融合する、もしくは集中が集積を占拠した私有内新型の集積、独自の集積としてあらわれる点において特徴的であり、集中に射ぬかれ制覇されこれ一色にぬりつぶされたいびつな性質からして、これに注目すると、集積が集中の代用語となる根拠もいわれのないわけではないし、レーニンの集中=集積の術語も、これにかかわっているように考えられる。ところで、集中に私物化されたこうした集積は、いつでもどこでも、内部には位階秩序に色どられた集中を必ず抱えている。この新型独自の集積をレーニンは独占下の集積 (Концентрация) と名づけた。

もともと、集積が集中を抱える古典的集積とは反対に、否、逆転して、集中が露出し、かえって内部に集積を遺留物として残して含むというのが新しい集積である。具体的には、市場を分配し、社会を山分けしたぬけ駆けの集積なのではあるが、それは、内部に元請—下請の位階ぶくみの集中を抱えた場合にはじめて可能になり、成立するのである。

生産上の資本集積をもって産業内の勢力圏を山分けした形態のこうした私物化があるとき、独占はあらわれるが、この産業独占によって、商業上の資本、とくに銀行資本をいまいちど占拠するとき、産業資本と銀行資本の合体としての金融資本が生じる。この金融資本が他の同資本との寡占状態において、一定の歴史段階の社会を山分けするとき、金融寡頭制があらわれる。産業的独占資本は銀行資本を私物化して、金融資本に、金融資本は、他の諸資本を私物化して、金融寡頭制となるという連鎖の展開が、レーニンによみこむわれわれによるかれの一解釈である。少なくとも、生産の集積、金融資本、金融寡頭制といった一連の概念のうちに、位階をばねにして展開をとげる私物化論理の連鎖が介在し、まつわりついているものと考えても、誤りではないと思う。

レーニンによると、まず第1に、「国の全企業の総生産額のほとんど半分が企業総数百分の1のものの中にある！ そして、これら3千の巨大企業は285の工業部門を包括している。このことからして、集積は、その発展の

一定段階では、おのずからいわばびったりと独占にまで接近してくるということがあきらかである。なぜなら、わずか数十の巨大企業にとっては相互のあいだの協定にたっすることはわけないし、そして他面では、まさに企業の規模が大きいということのために、競争が困難となり、独占への傾向がうみだされるからである」(前掲書、22—3夏)。

独占を、単位を位階に配置した集中、あるいは市場を山分けする集積と考えて、以上の文意をみると、位階—私物化の独占事業に不可分にまつわりつく事情が視界にはいつてくる。企業規模が大きく集中で巨塊化しても、これを位階がとらえ掌握しなければ、かれらを自滅においこみかねない一段と熾烈な競争こそ発生しても、独占化の傾向は失われてしまってあらわれない。位階に染め上げられた単位による単位の集中、集中によって射ぬかれてしまったが、不発の共有としてなお私有にとどまるねばり腰の集積、これをレーニンは集積としてとらえて、独占理論の構築に使用しているのである。

キーロフは、生産集積の結果としての独占化(Монополизация)を、レーニンが現代資本主義の一般的にして基本的な法則だと呼んだのと述べている³⁾が、集積、独占化を、それぞれ位階の集中と私物化におきかえるならば、まさにその通りである。固有な意味の集積と集中は私物化と位階であって、それぞれから計画性が生じたり、生産の社会化が産みだされたりする。

第2に、「生産の集積、そこから発生する独占、銀行と産業との融合あるいは癒着——これらの点に、金融資本の発生史と金融資本の概念の内容がある」(前掲書、65頁)。金融資本は「産業資本に転化されている銀行資本」(前掲書、64頁)、「産業的独占団体の資本と融合している独占的な少数の巨大銀行の銀行資本」である(前掲書、127頁)。

レーニンによる帝国主義の定義づけにみられる5項目のうち、前半の1)~2)は、同類の位階—異種の癒着—社会の山分けにして、国内の、それゆ

3) В. Киров: Межотраслевая концентрации производства в современных монополистических отношениях, *Экономическая Науки*, No. 1980, стр. 66.

えに一般の状態に相当するのにたいして、もう一つ、後半の3)～5)は、国際間の状態、したがって特殊に限定された状態に着目した、同じく三つの連鎖項目であろう。

「(1) 生産と資本の集積は高度の発展段階にたっし、経済生活において、決定的な役割を演じている独占をつくりだすまでになったこと、(2) 銀行資本と産業資本の融合と、この『金融資本』を基礎とする金融寡頭制の形成、(3) 資本輸出が商品輸出とは別に、とくに重要な意義をもっていること、(4) 国際的・独占的資本家団体が成立して世界を分割していること、(5) 地球の領土的分割が資本主義的最強国により完了されていること」(前掲書、127頁)。

もういちど、「帝国主義とは、資本主義の一発展段階であり、そこでは独占体と金融資本との支配がつくりだされ、資本の輸出が顕著な重要性をもつにいたり、国際トラストによる世界の分割がはじまり、資本主義的最強国によるいっさいの領土の分割が完了している」(前掲書、127頁)。

ここに上の三つの連鎖事項がみられないだろうか？

C 独占による社会風化

独占、内質的には、同類位階がいかに社会を風化し、民衆に迷惑をおしつけるかは、レーニンの看過するところではなかったし、これを独占の標識とするのも忘れてはいない。たとえば、次の文節は、この一角として、レーニンから引きだしとりあげてもよいだろう。

「……資本主義のなかから発生し、資本主義、商品生産、競争という一般的环境のうちにあつて、しかもこの一般的环境とのたえまのない、解決の道のない矛盾のうちにある独占である。だが、それにもかかわらず、この独占は、他のすべての独占と同様に、不可避に停滞と腐朽化の傾向をうみだす。たとえ一時的にせよ独占価格が設定されるかぎり、これに応じて

ある程度まで、技術的進歩——したがってまたいっさいの他の進歩、前進運動にたいする——刺激的原因が消滅し、さらにまた、技術的進歩を人為的に阻止する**経済的可能性**であられる。……もちろん独占は、資本主義のもとでは、競争を世界市場から完全にまたは長期にわたって排除できるものではない。……だが一方、独占に固有の停滞と腐朽化との傾向が、それはそれとして作用をつづけ、個々の産業部門や個々の国々で、ある期間、勝ちを制する」(前掲書、142頁)。

「独占、寡頭制、自由への努力にかわる支配への努力、少数者の最も富強な、あるいはもっとも強力な民族による、ますます多数の弱小民族の搾取——これらすべてが、帝国主義を寄生的あるいは腐朽しつつある資本主義として特徴づけさせる諸特徴をうみだしたのである」(前掲書、178頁)。

同類の位階が作用を貫徹する過程の果てるどころ、異種の癒着を副産物としてもたらしながら、社会の私物化にたどりつく論理は、内容をとりいれて考えると、位階の担い手としての下請を破産単位から拾ってこれを累積する独占の習性からして、これらを資本として従来通り、遇する必要上、価値をインフレートする点にあるが、このインフレートを実質的なものに転化する努力こそ、かつては物価の下落としてあらわれた公人剰余価値をよこどりして入手する有力私人主の、独占主の営為である。入手したこの剰余価値によって、高物価の非低下が確立するが、破産単位は、安んじて生存を保障されつつ、独占の柱石として役だち、逆に、物価をも維持する。独占主を代表人格とする同類の位階と対物的私物化は、かれらによる価値インフレートと公人剰余価値の掠奪として具象化する。掠奪された公人剰余価値は、物価非下落として、価値インフレートをうらうちして、劣質単位を破産から救済して、下請に配置し方向づける。高物価、または価格の非低下こそ、劣質単位の生存を保障し、ひいては社会を劣化する事業に役だっているというわけである。剰余価値を失った公人は、物価非低下とともに、「公害」の姿としてあらわれる公務の不全、機能障害(dysfunction)におちいりがちである。

独占関係が同類位階と私物化を社会の基本的骨格としているように、資本単位の生活上の高コストと高い物価水準とは独占に特有な現象である。

物価騰貴一般から、独占下の物価高騰を区別する特徴は、下敷としての劣質単位の累積といった価値インフレーションを内基にもつ点にあって、景気の不好にかかわらない。破産は不況に輩出するから、むしろ不況期に、高価格に支えられた下請の編成が必要となる。この現象は、不況下の高価格、インフレーション下の失業などを内臓したスタグフレーションとして、人びとの視角にはいつてくる。

ポロホフスキーによると⁴⁾、「資本制独占こそは世界をとらえる先進的インフレーションの基本的原因である。経済的な生産の落ちこみ (спад) の時期でさえも、独占によって維持される価格の騰貴は通常になった。この結果、貨幣流通の諸法則の作用はくずれるにいたった」と。

独占が価格の恒常的騰貴の原因だとは述べるが、これ以上のことを、ポロホフスキーはほり下げて考えているわけではない。

低下しないか騰貴する高物価は、社会の最低限単位の品質水準をひき下げ、この単位の累積を支援するから、社会風化の一般的帰結だが、同時に前提としても役だつ。

独占は、社会を風化することによって、これを、人びとの低迷、惰落の姿で巻き添えにするし、今日では、核の脅威と公害によって社会の全滅も誇張でなくなるほどに、危機に曝している。こうした部分とひきかえの社会全体が代価になるのではなく、逆に、独占主をふみ台とする社会の解放も、もう一つの可能性として、胎動するし、風化の防止にとってはこれしか有効な方向はほかにない。これは独占が避けているものをあえて招くことである。これは可能であるのみならず、必然的である。独占でもって可避したものの再招来について、レーニンはこう述べた。——

4) А. А. Пороховский: Капиталистическая монополия и товарные отношения, Вестник Московского Университета, No. 6, 1981.

われわれの目のまえにあるものは生産の社会化であって、けっしてたんなる『からみあい』ではないこと、私経済的および私的所有者的諸関係は、もはやその内容にふさわしくなくなっている外皮であること、この外皮の除去が人為的に長びかされるならば、内容はどうしても衰退せざるをえないこと、また…比較的長いあいだ退廃状態をつづけることがありうるとしても、しかし結局はかならず、除去されるであろうということが明白になるであろう」(前掲書、182—3頁)。

独占はこのままでは、人びとと社会に、いずれは、滅亡を与える。これは全体を代償とした部分の不合理な救出である。これに従いたくなければ、部分としての独占行為に死んで貰わねばならない。これは部分を代償とした全体の保全、独占を犠牲とする人類の再生である。